

野球ばなし

“オール福生”

出席者

井上重男 清水喜一 田村芳夫 八巻基雄 村野晋三 平井賢治 浅見裕康
記録 山崎茂男

これは、座談会で話しあってもらったものを、記録係りの方で、要旨抜粋して、このような記事に
させていただいたものである。

(文中、敬称略)

ようらん時代

昭和のはじめ。現在の本町八町内にある、市営住宅のところに、ちょうど、今の牛浜グラウンドと同じくらいの野球場ができた。周囲はまったくの畑で、日陰がなく、ひろびろとした球場で、種々の大会が行なわれた。

野球場の影響で、そのころ野球チームもつぎからつぎへと生まれた。いままですいぜいゴムマ

リでしかやったことのない連中が集まって、猛練習を始めた。当時は大人は全部硬球で、軟式は子どもの遊びと想っていたので、みんな指を傷だらけにしてやったものだ。

玉陽が学生を主体にしたチーム。イーグルスは実業団。その他、クラス会別のチームができた。町内対抗をやったのだから、まことに盛大であった。

加藤市蔵を中心にした加藤一家のチームもあった。“ふじや”の加藤親子、加藤進一等々の一族メンバーであった。

当時の選手には、横田寿夫、山川義夫、田村弥三、原島弥七、飯田茂、飯田四郎、橋本孝蔵などがいた。梶梅三郎は、世話役であり、審判であり、野球狂の主であった。

しぜん、子どもたちの野球熱もたかまり、ナイト、ホクトが生まれ、おたがいが覇をきそい、むしろ子どもチームが大人よりうまくなってしまった。特に、野球狂は、ていしば(停車場——現中央町会)の子たちであった。中でも投手の田中政男(戦死)がうまかった。

時はうつり、彼等少年が青年団の若手となったころ、青年団五支部(本町)に、本場風の野球チームが誕生した。

福生が町制をしいた翌年、昭和十六年ごろである。

メンバーは、支部長の森田平治と、大野行夫、前田成一、飯田慶太郎、清水喜一、田村芳夫(保坂)に、二見孝一、水村四郎、森田宗吉等々。その中で、水村、森田宗吉の両君は戦死、二

見は戦後に事故で帰らぬ人となってしまった。

同じころ、熊川の地区でも、三支部に野球チームができた。青年団三支部からとって、三青と名づけた。

メンバーは、森田正、片岡幹雄、小林貞雄、東山秀夫、野島久雄、深沢武夫、成島太一、森田治平、野島登、加藤繁夫、森田安治、森田健庫、斎藤享等であった。主戦投手は森田で、深沢がマスクをかぶった。

やがて、日本が選んだ悲しい戦争拡大のコースのため、これら若者は、戦地へ走らされた。野球どころではない時代が続いた。

戦後の全盛時代

戦争が終わって、世の中はますます混乱した。大人たちは呆然とした生活だった。若い人だけが、食うや食わずの毎日の中で、たくましく動いていた。

野球好きの連中も、じっとしていなかった。

清水喜一が南のスマトラから復員してきたのは、二十一年の七月だった。疲れきった復員姿で、ガタピシの中央線の電車の中で、なつかしい福生を想っていた。その清水の車に、偶然、三鷹駅から乗り合わせたのが保坂だった。

「俺の家は残っているか」と先に復員していたという保坂に清水が聞いた。「無事だ」と言われると、つぎには二人の話は野球になった。立川の駅へ着くと、そのホームで八巻基雄が近づいてきた。

すでに福生には、福生実業が結成されていて、八巻はその主戦投手であった。その上、東京都軟式野球連盟秋川流域大会なども派手に開催されていると聞いて、戦前の名投手、清水の腕はむずむずした。

福生実業のメンバーは、(投)八巻基雄、(捕)前田成一で、内野が井上重男、加藤達、田村芳夫、岸朗、村野晋三に、外野が石川信三、笹本源治等々のメンバー。投手には田村治平もいた。これに清水喜一が加わった。

二十一年四月二十八日。熊川の都友チームは、西多摩郡野球リーグ戦の一回戦で、五日市と対戦し、七対二で快勝した。二回戦は西多摩村チームに四対三という僅差で敗れた。

森田正の、この日の日記によれば、その時のメンバーは次の人たちだった。

(数字は打順・下は守備位置)

1 田村孝一(左) 2 野島博(中) 3 東山秀夫(一) 4 小林貞雄(遊) 5 平井賢治(捕) 6 森田正(投) 7 倉島先生(右) 8 篠田益夫(二) 9 佐藤(三)。ほかに樋口先生、小林伸夫、岩田利一、森田健庫等が参加していた。

また、福生以外のチームの選手たちは、

オール羽村が、

元代議士の並木芳雄、そばやの加藤謹之助、背丈は小さかったがうるさかった荒井兄弟。豊田医院長の豊田正穂。

調布実業団が、

速球投手の清水大松（志茂、清水肉店）、監督兼任の増毛光一（捕手に増毛雄三（元福生一小校長）。足が速かった中村音吉に土方信雄、そして田中一郎、野崎一作。

オール五日市は、

農大生で剛速球投手の鈴木裕、五王の運転手だった鈴木宗太郎捕手。内野では、陸上でもならした東秋留小学校長の田嶋広治、陸上百米で好記録を保持していた鈴木庫治。その他渡辺房雄、木住野達也、小峰利三郎、網野正一。外野の乙戸精一に石川周蔵。歯科医の高取真一は、いまでも当時のスコアをもっている。

オール西秋留の選手を守備位置であげると、

（投）平野久一、渡辺敏男、（捕）松井奎吾（一）高木瑾一、内田米吉、（二）橋本知久、（三）杉田重雄、平野軍三、（遊）高木清八、関田実、（左）藤森良治、増田辰雄、（中）橋本万三郎、（右）平野道雄。監督は平野久一で、捕手もつとめた。いま、平野は秋多町消防団長であり、杉田重雄は福生一中の

教頭である。

ほかにまだまだ強豪チームが多かった。

青梅のさざなみ、青梅実業、アサノセメント、オール増戸にオール平井等々三十チームぐらいが参加していたろう。

福生実業は、青年団クラブでも合宿訓練をやった。なにしろ、衣、食、住とも不足だらけの時代であった。合宿とはいえ、とても同じかまの飯など食えなかった。それぞれが自宅で夕食をすませてから、クラブへ集まった。井上重男監督のミーティングもあった。朝は早起きして、駅前通りを、わっしょいわっしょいとかけ足。それから、一小の校庭で練習した。八巻は井上監督につきつきりではじられた。そしてめきめき腕をあげて、都下球界で名をあげていった。

練習をすませてから、家へ急いで帰り朝食をとる。そして、あたふたと勤務へ向かう毎日だった。ユニホームも、そろいのものなどつくれるものではない。胸のチーム名なども、八巻の学生マントをもってきて、皆でそれを切り、太田屋へもって行ってぬいつけてもらった。

井上重男は、学生時代のクリーム色のユニホーム。二見孝一は、グレーのカッコいいのを特製した。八巻基雄のズボンは、柔道着のだった。

村野晋三は、畑の農作業をさぼってかけつけるので、たいてい地下足袋にゲートルだった。前

田成一は、ひき売りの青果物のリヤカーを、どこへでもほうり出したまま野球に熱中した。球は半硬球で、皮がペンキで白くぬられていて、打球はいい音がしたが、たちまち使えなくなるようなものだった。

当時の野球熱心に火をそそぐように、応援団がまた熱があった。練習のときでも、試合中でも、ホームベースのすぐ近くまでおしかけて、選手の振るバットで、すこしぐらいなぐられても笑って見ていた。ハウルボールが教室のガラスをガシャンとわっても、ドンマイドンマイ、などとすまして見ていた。学校では困りきってしまい、窓に金網をはりめぐらした。

一小的庭は、とてもこんな連中がホームグラウンドにするには無理な所であった。

レフト方面は広いが、センターは近い。正門から青年クラブ、そして山崎うどん屋があり、その手前に鉄棒や肋木などの器械体操具が置いてあった。それらにじまされて、センターと二塁手は接近していた。ライト方向も近かった。選手は要望を出して、その方向の桜の大木を切り倒した。農場もグラウンド化した。これで、ライトは広くなった。クラブや、うどん屋は、動かすわけにはいかなかった。

打球がクラブの屋根にあがれば、ホームラン。門の左側は二塁打。鉄棒と肋木の向うへいけば、三塁打などの決めもあった。とにかく、当時うどん屋の屋根はこの打球で被害甚大だった。

石だらけの校庭などに文句を言うゆとりなどなく、ただ夢中で球を追っていた。

昭和二十一年の国体優勝チームは黒獅子で、そのチームの中には、後にプロ入りした選手が三名もいた。その都下予選は上井草球場で行なわれ、都下大会決勝で、福生実業がこの黒獅子とぶつかった。八巻の好投でよくたたかったが、惜しいことに打撃の援護がなく、このプロ級のチームを相手に一対ゼロで敗れた。

この時の福生実業の打順は、保坂がトップで、飯田、清水、前田、村野、加藤、石川、八巻、岸の順だった。

やがて、福生実業はオール福生となり、先のメンバーに、農林学校で大器とさわがれていた平井賢治が加入してきた。監督には遊佐勝三が就任した。平井は、前田のあとの本塁を守った。一小教員の金井清が遊撃を守った。投手には伊東源一も加わった。

氷川、青梅、五日市それに福生地区というようにブロックに分かれて、西多摩野球の全盛時代であった。

町の理解者たちも気をよくして、選手たちには何も気づかれぬ風に、寄金をもちより慰めもした。遠征試合には、交運社提供のトラックで、応援部隊がワンサとくり出した。

梶梅三郎を筆頭に、原島弥七、並木竹松、加藤一良、田村弥三、横田寿夫、松本床屋、橋本孝蔵、横田寿照、井上金重、堀田薬局、木水旅館、鈴木印房等々、ほかにもこの方面のファンが、どこへでも出かけた。梶梅三郎は、試合の審判としても、そのほかでも、この方面の“顔”で、

特にその活躍が目立った。

牛浜グラウンドで巨人・国鉄戦

二十二年の九月には多摩新産が誕生。

西多摩軟式野球連盟の大会では、この多摩新産が毎回の様に優勝していた。

選手の顔ぶれを見ると投手には、元プロ野球の選手で往年の名投手古谷庫之助と小川の二人。満鉄時代の名手金親辰夫内野手がいた。地元からは田村芳夫、清水喜一、佐藤貴、平井賢治が加わっていた。

かくして、都下に多摩新産ありと知られて、後楽園球場で行なわれた都の大会にも毎回参加して、その中でも強豪で通った。

そんな熱のあがりきったころ、牛浜にグラウンドができた。その牛浜グラウンドにプロ野球公式戦の巨人・国鉄戦がきたのは二十五年のことである。国鉄は本水旅館に、巨人は深沢に宿泊した。試合当日花束贈呈をしたが、国鉄側の紳士ぶりとなり、巨人側が、その花束をひきずるように手荒く扱い、ベンチにさっとはうり出すようにしたのが、この日の観戦者の特に印象に残ったということだ。

時はうつり

戦後の混乱期はまもなく去った。世の中がおちつきをとりもどした。その日ぐらしのようだった人たちも、活気をとりもどしつつあった。そのあらわれが、福生から、都心の大企業や、工業地へ勤務する者が増えたことである。

大会社では、その福祉面等から、あらゆるサービスが、働く人たちを対象にすすめられていった。野球好きには、地元のチームでは考えられないような、優遇されたチームづくりがされていた。

かつてのような郷土チームの活躍ぶりは、福生ばかりでなく、この地方のどこからも消えていってしまった。

全盛期を過ぎたオール福生のメンバーも、このような風潮と、加えて、その家庭や職場での重みが増す中で、野球一途から仕事一途への変化をしてゆく。

メンバーもがらりと変わっていった。

野球ばなし

(投)古谷滝蔵、小林政一、(捕)桜沢正一、(一)井上勇、村野和男、(二)清水家寿忠、竹内幸三、(三)長谷部操、加藤福三、(遊)鈴木益海、(左)長谷部忠、(中)柚木誠一、高橋守、(右)伊東幸吉らで、チーム名は若笛と称した。

三十年ごろには、浅見裕康を中心にした学生「オール福生」が活躍した。田村洋三や村尾光也を中心選手にしたこのチームは、三多摩軟式野球連盟大会で、たびたび優勝している。

このころ熊川の森田登は、日大三高の選手として甲子園にも出場した。

三十五年に福生町体育協会が発足し、その中に福生町野球連盟も誕生した。

かつて、オール福生が活躍した当時のような派手さはなくなったが、その後輩連による野球チームづくりは尽きることがない。そして、近隣の若者たちとの交流はますます賑やかである。

以前に、オール羽村の内野手で活躍し、後にながく国会議員をつとめた並木芳雄は、いまでも当時のメンバーに出あうとくりかえす。

「我々が対戦していた当時のオール福生は強かったよ。ことし（四十六年）のプロ野球巨人軍が、当時のオール福生と対戦したとすると、とてもかなわないんじゃないかと思うね」と。

福 生 柔 道 会

この記事は、柔道関係数人の方に聞き歩いた話を、まとめさせてもらったものである。

（文中、敬称略）

記録 山崎 茂男

福生の柔道は、青年団倶楽部を道場にして栄えてきた。昭和の初期、当時の柔道、剣道の愛好者たちの会であった、堅志会のメンバーが先頭になり、第二水道の事務所の払い下げをうけて、青年倶楽部を、第一小学校前に建設した。堅志会の仲間は大部分が青年団員でもあったので、その青年団と話しあい、青年倶楽部に新館（二階建部分）をつけて、旧の平屋の部分を道場とした。戦前、この道場の指導者は、青年学校の教官であった榊健太先生であった。また、背負投げを得意とし、当時の西多摩郡武道大会で三年連続優勝した福生チームの主力であった、設楽美知が榊先生とともに青年の指導にあたっていた。

このころの猛者をあげるなら熊川で森田喜一、中福生の森田芳松、加美の町田保雄、本町では細谷正治、保と、篠崎善一、繁の兄弟、島田福三、遠藤竹蔵、飯田三一、田辺修一、内田芳郎な



第1回五市三郡大会に優勝した福生の柔道会

どがいた。また中福生の木村末男は内またの技が特にさえていた。今、二小にいる斉藤弘も強かった。

学生会の選手といえば、長沢の伊東勝太郎、本町の木水昌男、志村要作、鯉淵正（並木）、栗原清、大野達夫などが中心であった。ヒマラヤ登山で有名であり、不幸にして故人になられた森田格（中福生）も小粒ながら強かった。福生小学校には田嶋定雄がいた。

戦後になり、二十六年に熊川の平井賢治が青年団長に就任した時、設楽清一が口を切って福生柔道会をつくった。はじめ、福生警察の大村さんに相談にいったら、福生でやると、榊健太先生というよき指導者がおられるので、きつとさかんになるぞ、と予言された。榊先生とともに、細谷正治、大野達夫らにもその指導を願って、熱

心にけいこをした。

そして、二十八年ごろはまことに盛大となり、一時は会員が二百五十名をこえた。なかには、中学生や小学生もいた。ほかに瑞穂、秋多、羽村などからも青年がかよってきた。横田基地が近

いせいもあって、米兵も入ってきた。

この年の昇段試験で、森谷潔三段、松本正男、来住野圭也各二段、石川末男、斉藤求各初段が誕生している。

青年団の団長をしていた平井賢治、設楽清一らは以前からの黒帯であったが、三十年ごろには、この福生柔道会の有段者は百名にもなった。それまでは、その昇段試験に水道橋の講道館まで出かけたものが、こうしたこの地区の熱意が認められ、また榊先生らの奔走もあって、このころから八王子や国分寺でも講道館の資格がとれるようになった。

当時、昭島市でも柔道会がさかんで、同市主催の三多摩武道大会が開かれた。その時、福生からはA・B二組が参加し、A組が準優勝した。選手名はA組が

大野達夫、渡井明、高崎勇作、西村（米軍基地内）だった。高崎勇作は明治大学柔道部員で、きれいな内またがさえた人だった。

B組は

設楽清一、松本正男、井上威、中川俊一、村野尚史、来住野圭也であった。

福生の柔道熱が最高になったと思われたのは三十年ごろのこと。福生柔道会のよびかけで、三多摩柔道大会が、福生第一小学校庭で開催された。その時、日本柔道会最高の達人、三船久蔵十段をこの地に迎えた。三船十段はその日、宮中の御前試合の審判を担当されていたが、その試合

場に控えていた設楽美知、渡井明が、三船十段をその試合終了とともにこの福生の試合場にご案内した。

三十一年五月には八市三郡の柔道大会が開かれ、志茂の安野恒次が優勝した。福生柔道会（現会長は細谷正治氏）は、その後も活発な活動を続け、福生市体育協会を通じて、市民の体育振興の一翼をになっている。

一つだけ不幸なおしらせがある。この柔道会育ての親の榊健太先生は、四十一年九月に、七十四歳をもって病いのため他界された。

先生の平素の活躍ぶりは、社団法人善行会によく知られ、その表彰が決定された。が、その内報を耳にされただけで先生は他界されてしまった。

後日、次のような賞状が、未亡人の榊マツさんに伝達された。

彰 状

榊 健太殿

あなたは長年にわたり柔道を通じて地域の青少年善導のため献身的に尽して来られました
よって善行銅章を贈り その行為を表彰します

昭和四十一年十一月二十八日

社団法人善行会会長 足立 正

体育女教師回想記

吉 野 ち え

わたしが福生にお世話になって、二十有余年の歳月が過ぎてしまった。

はじめて、五日市線熊川駅の線路に飛び降りたのは、昭和二十三年の春である。

熊川の駅で線路に飛び降りた、と書いたが、おおげさなことではない。当時は、五日市線は発車回数も少なく、非常にこんでいて、乗りようによっては車がホームからずっとはずれて止まった。そんな時には、いきおい飛び降りる結果になってしまった。

駅のまわりには家が数軒しかなく、駅を出て玉川上水を渡り、細い畑道を通って牛浜駅（当時は仮駅で、東の踏切側に改札口があった）を越え、福生中学校に初出勤した。（当時は現第三小学校の所が中学校だった）

その中学校は義理にもスマートな学校とは言えなかった。屋根は古いセメント瓦の平屋で、コの字型になった建物であり、グラウンド入口の真向かいに玄関があった。

だが、この校舎は一年足らずで、その翌年の秋には、みんなで机や椅子をかついで、現在の福生一中に民族の大移動？の引越しをした。

当時、福生一中の所は、松と雑木の集まった林で、その奥には杉も生い茂り、昼間でも暗くてこわいような所だった。

秋の体育祭のころには、体育の時間に、そのあたりを生徒と駆け足をしながら、きりん草やりなどを手折り、職員室の机上に色どりを添えたものだった。夕方生徒が去った校庭の周囲では、松虫の鳴き声が賑やかだった。一度でいいから松虫の野生の姿を見たいと思ったが、それは残念ながら実現できなかった。校庭は、林をきり、ブルドーザーでそのあとをならした状態で、その中に二階建の白い校舎が建っていた。

それからは、校庭整備との戦いだった。休日返上で、PTAの方々の協力を得て、グラウンドの地ならしや石炭がらをずいぶん入れたものである。それについて、バスケット、バレーコートづくりの木の根掘りに、手を豆だらけにし汗を流した。今も校庭に立つと、当時の汗の匂いがあるような気がする。この校庭で、生徒たちは走り、跳び、投げて育っていった。

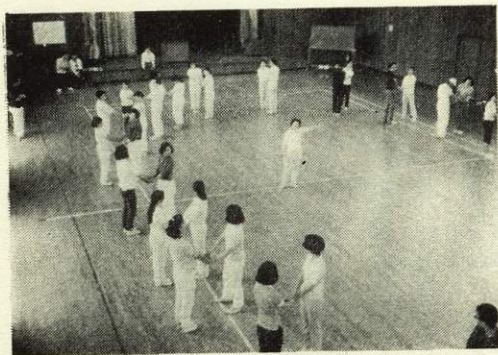
そのころ、福生町制十周年記念（二十五年）の町民運動会があり、中学女子生徒によるマスケームや記念の人文字を、グラウンド一ぱいに描いたことを記憶している。

秋が深まると、慣例の校内マラソンが始まる。学校の前の青梅線を越えたところの畑の中に、

広い砂利道があった。ここをマラソンレースの出发点とした。今の西村医院前の所で、霜どけの道はぬかってひどかった。

コースは、学校前——銀座通り——本町——長沢——加美——新堀橋を渡り、上水の林の道を走り、永田——中福生——牛浜の順だった。大変な長距離であったが、男子は一年から三年まで全員参加した。ゴール地点でストップウォッチを持っているわたしに、牛浜橋を渡る先頭集団が見えたのだから、いかに家が少なかったかがわかる。全生徒のひとりひとりがコースを完走し、真剣な顔でゴールインする。「よく走ったね」「頑張ったね」といたわりながら、順位の紙を渡す。その時の苦しそうな、しかし完走して満足気な生徒の表情、あの感激の姿は、いまだに忘れることのできない思い出のひとつである。

校内マラソンが終わると、郡の駅伝が開かれる。この頃になると、長沢の交運社前を出発し、奥多摩街道を走り、羽村中学校（現羽村西小学校）が折り返し点。放課後になると、選手を集め、ストップウォッチを胸からさげ、メモを持って自転車が発する。始めはいいが、走者のタイムを記録し、後を追いかける。やっと追いつくと、また次の走者を追う。なにしろ登り道。一生懸命ペダルを踏んでも追いつけない。情けない伴走者である。優しい生徒たちは、その私を見るにみかねて、頼りないコーチを助けてくれる。これが当時の私の日課である。練習が終わり真暗な校舎に帰ると、もう誰もいない。疲れた身体で椅子にひっくり返ると、なんだかわからない涙のよ



体育実技指導中の筆者

一生懸命指導した。

また、小曾木中学校（現青梅六中）に行ったこともよく覚えている。青梅線の青梅駅で電車を降りると、駅前に自転車を用意されていた。それに乗って峠を越えて、やっと学校にたどりつく。授業をしてまた自転車で帰る。こんなことは、今はまったく考えられないことだ。だから、その

毎日を見ていた父が嘆くのも、しかたがなかった。父もしまいには諦めて、何も言わなくなった。

あたり前のことだが、体育と言ってもどの教科も教えるので苦心した。専門の体育科を出と言っても、戦中から戦後にかけての時代で、生きていくのが精一杯で、満足に学習をしていなかった。特に陸上競技にはまいってしまっ

た。優秀な選手が出ると郡、都大会でのコーチはむずかしかった。教えることによって、わたし自身がすべてを学ぶ毎日だった。

当時、英語科講師で学校にこられていた秋山之保先生が一橋大学の陸上部に属しておられ、インターカレッジに出場するような技能の持主だったので、非常に熱心に私や生

うなものがほほを流れた。あのころはワカかったなあ――。

その年は、全校生徒数八百名ぐらい、体育担当は泣きべそかきの女ひとり。それが全生徒を受け持ちしたので大変だった。六三制が施行されたばかりなので、アチーブメントテストも全教科制、その上に各教科の項目ごとに評価をするので、それもおおごとだった。

定期考査が終わると、校内の学級対抗球技会を開く。その間に他教科の先生は、成績表の記入をしているが、体育教師はその運営に当たるわけだ。わたしがへばりそうになると、野球部、バレー部の生徒たちが、よく協力し助けてくれた。「早く帰って休んでください――」と。私的なことだが、当時夜間大学に席をおき、「卒業論文」の提出を迫られていたことなどもあって、本

当に助かった。あの時の苦勞は、今も忘れられない。

バレーボールもよく練習した。福生中はわりと強くて、郡の代表になり、学習院で開催された都大会に何回か出場した。そのかわりに土、日はもちろん、夏休みとて一日も休めなかった。「学校では休みも与えないのか。人使いがあらすぎる。やめたらどうだ」と無口な今は亡き父がたびたび言ったものだ。そう言われるのも無理もない。当時は中学校に女子の体育教師が少なく、運動会の季節になると、他校へのダンスの出張授業にもかり出された。遠くは小河内中学校。まだ湖の出来ていないころで、バスにゆられて行った。小、中学校併設校の校庭には、日曜日なのに、生徒が集められ、わたしを迎えてくれた。そこで運動会のダンスを一回で覚えてもらうために、

徒を指導してくれた。わたしの陸上競技に関する知識は、この時に身についた。とにかく必死だったが、楽しい時代であった。

女子走高跳で一米四十五糎をマークした熊川の森田千代子さんのことは、今も脳裡に浮かぶ。クラス委員でありバレーボールのポイントゲッターでもあった。今はよきママさんになっていることだろう。

野球部は直接指導はしないが、スコアブック付けで試合などにはいつもついて行った。どういうわけか、わたしが行くと勝つという縁起をかつがれて、ついて行かなければならないはめになってしまった。そんなことで、生徒たちが各部ごとにやるキャンプなどには、毎回参加した。ていのいい飯炊き係りということだ。ともかく野球部はよく食べる。大きな釜一杯にごはんを炊いても、一人が飯茶わんに十四、五杯食べるのでまったものではない。うかうかしている、こちらが断食にさってしまう。

相模湖へ行った時、最後に食糧が乏しくなり、米にじゃがいもを入れて食べさせたことがあった。それでも足りなくて、車中でコッペパンを与えた情けない炊事婦さんだったこともあった。その時の人たちも、みんな立派になられている様子を風の便りに聞く。このころの運動部員に「会いたいなあ」と思う。こんなことも年齢のせいかも知れない。

ありがたいことに、社会体育の関係で、市内や郡の大会に出ると、必らず、どなたかから声を

かけられる。

「先生、わかる」「ああ誰々さん、ずいぶん大きくなったね」「先生ひどいですよ。これでもママさんですよ」

つい昔のことと結びつけてしまい、失敗してしまう。そのころの人たちが、どこかでこうして活躍してくれていると思うと、スポーツ気違いのわたしの心はあたままる。

試合場では、いい年齢をしてジャンパーなど着ているので、実際より若く見えるのか、その人たちが「先生はいつも若いね」とお世辞を言ってくれる。気をよくして「健康でいつまでも幸せでいてね」と別れる。

昭和三十一年に、福生中学校より福生第三小学校に転動した。初めて勤務した校舎に逆もどりで。でも中味は変わっていた。その年、中学三年生を卒業させ、感傷的になっていたわたしの前に、こんど並んだのは小学一年生。なんとかわいいことか。この子たちへの第一声の時、「ことば」のむずかしさを痛切に感じさせられた。

ともかく夢中だった。小学校に勤めたので、体育からはこれで縁が切れると思ったが、社会体育の方面は更に深くなり、町制二十周年記念の町民運動会に参加した。とても賑やかで楽しかった。

町の行事については、その他毎年開かれる青少年ソフトボール大会、青年団、婦人会の運動会

にも参加させてもらった。特に婦人会には親しくさせてもらい、市役所の広場一杯に集まってフォークダンスをした楽しい夏の夕べを想い出す。

郡の婦人会の運動会に、福生婦人会全員でフォークダンスをした。当時は珍しかったので、賞賛された。その他、婦人会は福生独自の運動会をしたり、卓球の支部対抗なども開いて若がえっていた。また、各支部の活動も盛んで、永田支部には、よくフォークダンスをおどりに行った。

郡婦人会の運動会は、毎年場所を替えて行なわれている。戦後十一回目を、四十五年の秋、福生第一小学校で行なった。二千余名の方が集まり、趣向をこらした競技、五十米競走、リレー。最後に校庭一杯に広がり、全員でフォークダンスをした。人々の美しい友情の集いに、段上にいたわたしは、おもわず強い感動にうたれた。

先に述べたように、第三小学校に来てスポーツから縁が切れると思ったのは、とんだ間違いであった。PTA地区対抗の球技大会は、ママさん達をバレーボールで夢中にさせ、次いで町内PTA対抗試合となり、郡、都大会にまで発展させてしまった。

もともとわたしは、学生時代（戦中、戦後の苦しい時代）には、バスケットボールを少しした関係で、いまだに学芸大学のバスケット部から年間の試合の報告が知らされてくる。十二月には慣例のOG対現役の親睦試合が開催される。心臓はいたって強い方だが、この招きには出席したこ

とがない。あまりにも年月が過ぎてしまったからかもしれない。

バスケットボールの教え子には、ボクシングで世界チャンピオンになった、海老原博幸さんがいる。一度会った時、よく覚えていてくれて声をかけてくれ、プロマイドをもらった。りっぱになっただけじゃなかった。

バレーボールは中学校で指導した経験を生かし、もちろん変わりゆく新しい知識をとり入れながら、第三小のママさんたちの熱心さと、わたしの下手な横好きがマッチして、いまだに続いている。

その他、社会体育の仕事としているスポーツ教室に、若い人たちが参加していることは、本当に喜ばしいと思っている。

昨年の夏は、市営プールで水泳教室が開かれた。熱心な人たちで、みんな泳げるようになってとても嬉しかった。市のスキー教室へも参加して十五年ぶりにすべてみた。

これからも、スポーツを通じて、ひとりでも多くの人たちと友人になり、スポーツの楽しさをともに味わっていききたいと希っている。

（福生市体育指導委員）

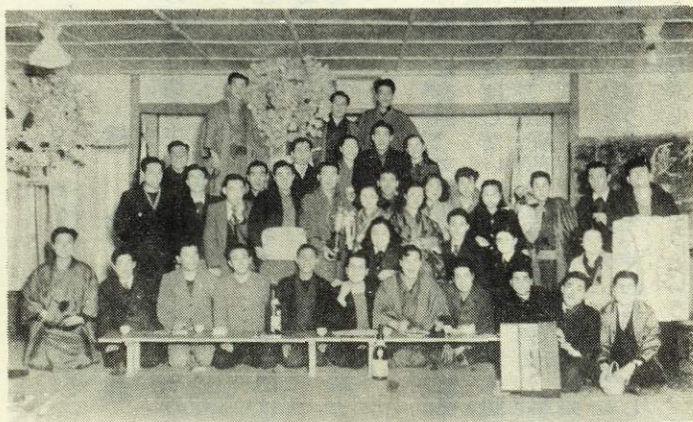
『子どもの意見』

福生町に図書館を

中二 女子

福生町には、小学校が五つ、
中学校が二つ、そしてプールや
公園まであるのに、図書館がな
いとはなんだかわびしい。
少しお金がかかるかもしれな
いが、良い本がたくさんある図
書館にしてほしい。そうすれば
福生の人はもっと本好きになる
だろう。

(『ぶっさっ子』第一集より)



演劇コンクール優勝記念 昭和24年11月
(青年団と演劇活動参照)